門かどの構造についての一考察

薩摩藩日州諸県郡浦之名村の場合——

高 倉 又 二

一 門の問題の考察は所謂「封建制の北極」としての薩藩の体制を維持する基底として、従って又、その克服が緊急の課題とされる旧同藩領下、南九州農村の「後進性」を規定する歴史的、社会的条件として、既に戦前、諸先学により先鞭づけられた。また戦後の研究は、その領主的、制度的考察から、その農業生産、村落構造に密着した農民の生活共同体的把握への深まりを示している(一)。

此等諸労作の御教示に基づき、筆者も同問題の日向的展開型態につき論述する処があった。(二)が資料蒐集の進行とともに、門の型態的内容的諸変差があきらかとなり、それは、門の構造の画一的固定的な取扱いと理解とを許さなくなった。したがって今後資料の充実、並に諸藩支配体制及びそれぞれの門の農業的立地条件との連関における比較検討を迫られている次第である。

るが、そうした志向の一端として「日州諸県郡高岡浦之名村宗門手札改帳」(高岡町役場所蔵)につき、門の一実態を観察し、大方の御教示に接したいと思う。

考察対象地、高岡郷浦之名村とは、現宮崎県東諸県郡高岡町大字浦の名一帯の藩政期村落である。高岡郷については、天保十四年、「三国名勝図会」(巻之五五)の叙述の通り、「此地他領と相接して実に枢要の所に係る」が故に、「本藩諸郷四十箇所より凡士人七百三十戸余を移」し、天ヶ城を築き当村を含め十二ヶ村を合して「関外北境の本鎮」となした薩藩最枢要の軍事的拠点である。宮崎平野を灌流する大淀川は、ほぼこの地点よりその名も浦の名川となり、ジグザグな溪谷急流はその河川添いに挟少数な追田を含む水田地を残しつつ、両側は山林原野がめぐり、その西端は「本藩の人、去川の險を知らざる者なし」

の難所となつてゐる。即ち、本村はかかる浦の名川添いの挾隘なる平地分に聚落を点在しつつ、山林台地をその後背となし、故にその立地条件は「闔村原野起伏、溪谷縦横(中略)……川涯ノ田ハ水害多シ」とされた。明治初年頃には、全村民有地計五六二町余中、山林原野三〇二町(外に官有山林四二六町)、田一二八町、畑七九町(外に不定畑、切換畑三一町)、総戸数一八八戸として現われているが(三)、現在も打続く台風冠水害を台地上の畑地及び国有林賃労働により支えながら、停滞的な農業姿態を保持している。

しかしかく藩政期を通じ、薩藩領高岡郷一村落としての本村も、明治二三年町村制実施により高岡村となり、大正九年町制に編入され現在に及んでいる。

二 考察の資料、「日州諸県郡高岡浦之名村宗門手札改帳」は、その奥書より明かなるごとく、寛政十二(一八〇〇)年申十二月十五日、検使二名、出役五名、郷士年寄五名、郷士手合一名立会いの下に、切支丹及び一向宗禁止を対象とする宗門改帳である(四)。また同改帳に基づき人別宗門手札が配布される関係上、同帳は、性別年令別身分別等々のいかんを問わず、該時における浦の名村居住者全員を記載している。即ち、「惣合男女五百四十四人」(内、男三〇九人、女二三五人、

男中に社人五人、山伏二人、病者二三人を含む）が上水流門以下一二二の門所属毎に、その年令、宗旨、世帯上の地位、名頭名子下人の身分格式別を明かにしつつ各人別に記載されている。また前年改め以降の婚姻及び養子縁組、出生死亡、養子不縁による帰家、老年病弱による格式譲渡、名子よりの格式上昇、その他、家出、欠落等々による異動関係も、各人別毎に註記され、その内容関係が相当詳細に窺い得る。従って、以下では、本資料の示す全村網羅的な記載、並に註記による内部的諸関係の叙述を利用して、まず村落構造との連関における門の型態、次いで、その変容動向の性格把握の問題に連なる門の内部的な関係構造の考察を行って見たいと思う。

まず、本村の門の型態的特徴につき観察する場合、既述のごとき一二二の門が全村内に広く散在的に分布していることが看取される。このことは、門名の数多くが古地図及び現存の字小字呼称との照合により、その分布の跡づけが可能であり、現存の主要なる字、狩野、川原田、赤谷、梁瀬、面早流、下六、深水、田の平、楠森、久木野等々はいずれも本帳における門名として現われている。従って、かかる門の散在的な分布型態に相応して、各門の小規模性が指摘される。一二二門の総人員は五四四人、従て一門当り平均所属

人員は四・五人弱に止まる。即ち、所属人員の規模別には、三〇五人の門が六九（五七％）の過半数を占め、六〇一人が三四（二八％）、一〇二人が一九（一五％）となり、規模の大なるものも、東原門の一人を最高とし、八人が五、九人一〇人が各一（雲雀野門及び畠中門）と頭打ちし、対照的に所属員一名の門が七つ存在することが注目される。（この場合の一名はいずれも名頭に於いて、最低十才の通り年少者が多く、所属員死亡による他門よりの養子を含み、所謂「明門禿門」の進行を窺わせる。）依て、本村の門は、その多数が単独戸により構成されることが窺われるが、事実、同一門内に二つ以上の戸数があるし、従て、名頭、名子の身分格式差をもつ門は二二門に過ぎず、他の一〇〇門は、いずれも名子なしの名頭単独戸より成る。そして、複合戸よりなる二二門も、雲雀野門で名子二戸を含むのみで（名頭五人世帯名子は各夫婦二人世帯）一二の門が、名頭、名子各一戸の構成を示し、残余の九門は名子を含むが、名子はいずれも世帯を有しない単独者である。

この場合は、係累の死亡による場合とともに、老人、片輪、馬鹿、眼病及び山伏出家等の特殊者であることが註記により指摘される。従て、本村の門の最多数たる所属員四人内外にして、名頭単独戸よりなる門の構成

は、父母夫婦子女の直系小家族的な世帯構成をとっている。名頭世帯主の弟が妻帯する場合に名頭世帯に含有される。なお注目されるのは、富屋門及び小原門に各一名の下人下女が存在することであり、その存在型態並に性格については後述する。

以上、本村における寛政期の門の型態的考察を通じ、その分布の散在性、存在の小規模性、及び構成の單純的傾向を看取したのであり、これらの門の本村的諸特徴は、門が藩政農民政配の制度的機構の所産でありながら、その指定及び展開の具體的型態は、諸種の客觀的諸条件、就中、その農業生産力を中心とする立地条件により規定され、様々の様相を以て現われ、決して、画一的固定的なものではあり得ないことを物語るものに外ならない。本村の場合、前述のごとき水田の稀少性と畑地切換畑への大きな依存とその不安定性という経営条件、更に「関外本鎮」周辺とはいえ、その「外城」・辺境地的な歴史的過程が、しかくの門の特徵的な實現型態を生み出した基因と考えられよう。

三 次いで、門の内部的な関係構造の考察に移る。門が名頭、名子、更には少数の下人の身分的階層構成を示すことは、名頭名子戸主の隠退死亡による直子の名頭名子成り、出生死亡、婚姻及び養子縁組、離婚不縁による

帰家、出家等々の諸般の異動の場合、すべて郡奉行の免許による庄屋郡見廻証文を必要とすることに示されるが、この階層制にかなり

流動性が介在することが註記により示される。また名子より名頭への上昇である。これは、他門の名頭が「年罷り寄り、直子無之、名頭難レ勤」き場合の「養子名頭成り」によるものが最も多いが、「右者利助事当門名子助太郎子に而候処……（中略）……右利助両親並弟召列、楠元門養子名頭成之願申上御免被仰付云々」の通り、名子が四人家族ともに養子名頭成りしている場合がある。逆に名頭より名子への下降の場合も存する。「右式人当門名頭喜右エ門親に而候処、去年手札御改之節、同村土橋門名子成之願申上御免被仰付、右名子札申置候処、年罷寄、名子難勤候に付、喜右エ門方江、右両親引取介抱仕度旨願申上御免許之旨云々」のごとく、名頭を直子に譲渡後、他門の名子成りをしている。然し以上の身分的な上昇下降は、門の名頭家の相続が不可能にして、門の存続そのものが問題となる事態の、謂わば藩政の必要より出るものであり、名頭及び名子家は、それぞれ世襲的な長子相続による家父長制家族たることをその原則とする。本村の川上大明神及び伊勢大神宮の、両秋楽者役、御供役のごときは、「跡目継目」が世襲され、

宗旨記載は、婚姻縁組後も実家分が用いられている。

婚姻及び養子縁組は、村内が最も一般的であり、五町、入野、飯田、高浜、花見等の他村との出入関係が若干見えるが、いずれも近接の高岡郷内であり、他郷よりは隣郷綾の北俣、南俣村より三件が存するのみで、他領よりの場合は、「御料児湯郡穂北村」よりの一件があるが、これは「右者本永寺永代抱門前女おと縁組の願申上御免云々」の通り例外的なものである。以上のような通婚圏の封鎖性の故に、村内にて、名頭の妻が名子家より来る場合、名子の妻であった者が名頭と再縁する場合等々が珍しくない。なお既述の下人下女各一の存在については、福路門の名子三助長男三右エ門妻の註記に「右者綾郷土池上源太左エ門永代抱下女にて、去れ手札御改之節、手札申請置、六番組黒木郷七永代買入置候処右三右エ門之縁組之願申上御免許之旨々」とあることより窺われるごとく、その性格は永代抱下人として、中世農奴の性格を濃くするものであるが、現存者は二名に止り、他に死亡者分二名の下人が見られることよりして、減少過程にあったものと思われ、このことは、次の欠落現象の存在、従て、門の荒廢化現象の進行ともからみ、藩政の労働力確保的意義に連なる性格のものであろう。

即ち、欠落については、二門の場合が見られる。川路門の名頭長蔵の場合は、「右長蔵事当門名頭長作兄にて候処、同村下水流門名頭孫八女子むつ召列、安永八年亥六月欠落仕、於他国子供出生、住居致居候処去れ午六月妻子引列、帰參被仰付候。右欠落に付而へ取扱之向も有之候得共、不及其沙汰慎赦免被仰付云々」（長作は長蔵欠落後名頭となり、長蔵欠落帰參後は他門の名子となっている）とあり、山田門の名頭長作の場合は、「右者名頭長作事、寛政元年酉十一月欠落仕、御披露申上置候処、去れ午五月帰參被仰付本門へ立歸候」（以下、処分に関しては前文同様、妻とともに「他国出禁止」となり帰參後、「名頭難レ勤」、名子新助を養子名頭成りとしている。）の通りであり、いずれも名頭層が家族ずれの欠落であることにおいて、その生計の苦窮が窺われる。

以上により、門の内部的関係構造の觀察を終らねばならないが、諸事例の叙述より見られる通り、其処に關係の流動的性格の存在を否定することは出来ない。然し、この流動性起動の本質が、受動的、消極的、内攻的なものであることを看過することは更に許されず、その自立化的発展方向発現を圧殺する、藩政による農民層緊縛の社会的わくづけとしての門の役割の貫徹持続化方向こそが評価さ

れねばなるまい。

(1) 鹿兒島県農地部編、「鹿兒島農地改革史」所収、山田龍雄氏執筆論稿分、或ひは「九州経済史研究」所収、原口虎雄氏論稿分等参照のこと。

(2) 佐土原藩の門については、西部社会学会「研究通信」所収、拙稿「佐土原藩

薩摩検地における門の構造」、延岡藩の門については、宮崎大学学芸部紀要所収、拙稿「幕末期日向農村構造の分析」を参照のこと。

(3) 明治十七年刊、平部崎南氏「日向地誌」記述より引用

(4) 一向宗の禁止については、同帳奥書

に次のごとく記される。「(前略)……且又一向宗之儀、茂御家御禁止被仰付候にて被仰渡旨、是又奉得其意、相改候得共、右宗旨之者、茂無御座候云々」。楠本村の場合、宗旨は禪、法華真言の三宗に限られる。

筆者 宮崎大学助教授

講座 現在の哲学

(六卷) —11月刊行—

岩崎武雄・山崎正一・原 佑・末木剛博 編

「分析哲学」

- 一、分析哲学の発展史(1)……吉田 夏彦
- 二、分析哲学の発展史(2)……吉村 融
- 三、意味と検証……大森 莊藏
- 四、記号論……末木 剛博
- 五、数学と論理学……中村 秀吉
- 六、倫理学説……杖下 隆英

「実存主義」

- 一、概 観……原 佑
- 二、キェルケゴール……飯島 宗亨
- 三、ニーチェ……茅野 良男
- 四、ハイデッガー……渡辺 二郎
- 五、ヤスパーズ……宇都宮芳明
- 六、サルトル……田島 節夫
- 七、マルセル……竹下 敬次
- 八、最近の動向
1. ドイツ……渡辺 二郎
2. フランス……市倉 宏祐

「マルクス主義」

- 一、概 観……山崎 正一
- 二、マルクス……宮川 透
- 三、エンゲルスおよびその周辺……城塚 登
- 四、修正主義……竹内 良知
- 五、レーニン……生松 敬三
- 六、レーニン以後……山田 宗睦
- 七、第二次大戦以後……古田 光

「プラグマティズム」

- 一、総 説……岩崎 武雄
- 二、真理の問題……山本 信
- 三、価値と道徳……黒田 亘
- 四、科学と宗教……魚津 郁夫
- 五、教育理論……三井 為友
- 六、最近の動向……福鎌 達夫

「現代文明論」

- 一、西欧文明とわれわれ……岩崎 武雄
- 二、現代文明における社会学の意味……日高 晋
- 三、現代世界における合理と非合理……中村雄二郎
- 四、現代文明と芸術……伊藤 勝彦
- 五、伝統と前衛……針生 一郎
- 六、機械文明と人間性……佐々木斐夫
- 七、現代における東 西思想……玉城康四郎

「日本の近代思想」

- 一、概 観……山崎 正一
- 二、近代日本の民俗……佐藤 俊夫
- 三、アカデミーの哲学……土方 和雄
- 四、社会主義思想……大井 正
- 五、プラグマティズムの受容……芝田 進午
- 六、近代的人間観……荒川 幾男
- 七、キリスト教思想……大村 晴雄
- 八、日本のナショナリズム……宮川 透

有 斐 閣

From an anthropological point of view, however, these researches are self-limiting as they are carried out at present moment. Since their findings took monographic form, these studies are not systematized, e. g., there is no Comparative unit by which the cultural process and technique in industry are systematically studied.

The problem these studies has not yet set itself is the precise conceptualization of the sociocultural situation which can lead us to predict that some factory situation requires a sequence of interactions by given individuals of qualitatively differed from other factories. In other word, we need to study the human relations in industry from point of sociocultural system.

In my judgement, sociocultural system are characterized by cultural tradition and developmental levels of industrialization. If we accept this view point and proposes to treat human relations in industry as a sociocultural fact, the question arises how we are to characterize our industrial situation as a sociocultural system. We cannot easily answer that question in terms of systematic treatment which my aim in this paper is to be tentatively examined. For the purpose of this consideration, however, we may express a hope that our cultural traditions, its local variations and its dynamic processes, as well as our national economic structure, and the developmental levels of industrialization should be taken into account. Then, intensive human relations studies in factories are, it seems to me, systematically accumulated.

A Study of the Structure of "Kado"

Matagi Takakura
Miyazaki University

This essay is an attempt to analyze the structure of "Kado" which played the fundamental rôle in the process of establishment and development of the feudal system in the Satsuma clan. In this clan, "Kado" which consisted of several farm-families and was organized by "Myōtō" and "Nago" as status-system, was the unit responsible for land-distribution, cultivation and taxation that was put to use to govern peasants as basic policy. The peasants' independent development was, therefore, thoroughly hindered by the communal stational obstacles of "Kado," and as its historical influence the backwardness in this districts has been brought up today. The actual forms and characters of "Kado" were, however, neither standardized nor fixed, and according to the situation of each village — especially its agronomical conditions, realized different forms and at the same time its relative significance changed also in the process of its historical transformation. Then, the author aims at explaining the diversity and liquidity Kado presents in the light of the actual data of "Uranomyomura" in this clan in 1800, in this paper.